

【議事要旨】 第2回横浜市立特別支援学校（肢体不自由）教育推進検討会	
日時	平成29年12月8日（金） 18時00分～20時00分
場所	関内駅前第一ビル 302会議室
出席者 （敬称略）	（委員）学識経験者、医療・福祉関係者、学校関係者、保護者会関係者 計8名 （事務局）教育長、教育次長 他6名
発言要旨	<p>（全体進行）小泉課長</p> <p>（資料説明）事務局</p> <p>（第1回での質問等に関する考え方の説明）事務局</p> <p>Q 左近山は遠方であり、北綱島に通っている子が通うのは遠くて無理では。</p> <p>A 北綱島に在籍している子はもちろん、周辺の子も現在の場所で受け入れる。北綱島から左近山に転校してもらうことは考えていない。</p> <p>Q 左近山を分教室にしてはどうか。</p> <p>A 現在、左近山の設計が終了し一部解体工事も始まっており、年明けには本体工事が始まる。新しい教育課程で将来的には100名規模の学校となる予定。分教室としての整備は考えていない。</p> <p>Q なぜ分校でなく分教室なのか。</p> <p>A H31、H32の市立・県立の整備により、市全体の肢体不自由児は受け入れが可能となるため、市が独自にいくつも学校を整備するのは難しい。</p> <p>しかし、保護者の皆様等から様々な御意見を頂き、北綱島を分教室として期限を定めずに存続させる。通学エリアも見直し、学校の過密化も解消していきたい。分教室での人員配置等にコストはかかるが、年度途中での柔軟な人員体制や、専門の人材の活躍など検討できることが、前回「フレキシブル」と表現させていただいた中身。これらを生かし、一人ひとりに適切な教育をしていく。</p> <p>Q 5校プラス1校にしてはどうか。</p> <p>A 左近山の整備、北綱島の分教室というのが結果として、5校プラス1校と考えられる。これまでの取組に変わりはない。また、市北東部地域の中長期的な人口増減に伴う、肢体不自由のお子さんの推移を見ながら、県とも継続的に議論が必要と考えている。</p> <p>Q 分教室に校長がいないことは大丈夫か</p> <p>A 本校の校長が統括する。しかし、北綱島は校長と同様な管理職を配置し、本校と連絡を密に取りながら進めていきたい。他校でも校長不在時は副校長や教務主任が対処している。職員全体の体制づくりが管理職の務めである。</p> <p>【以下、発言要旨】</p> <p>委員 北綱島の児童生徒数は自然に減少すると見込んでいるようだが、人口増加地区だから希望者は今後増えると考える。</p> <p>事務局 肢体不自由児は増加傾向にある。新設の県立学校の通学エリア等も含めて県とも調整していく。</p> <p>委員 市立は5校と決まっているのか。左近山の計画時、北綱島を閉校予定だったようだが、あのエリアから肢体不自由校が抜け落ちるのでは。</p> <p>事務局 「周辺の学校で受け入れていく」と考えていた。しかし、たくさんの御意見を頂き、分教室として残すことにした。ただ、今後の新たな通学エリアは、鶴見区港北区の一</p>

部と考えている。

委員

都筑区は県立が見るようだが、都筑区在住の子が、北綱島を希望したら通えるのか。

事務局

「就学相談」で保護者と話して決めるが、基本的には通学エリアの学校に通っていただく方向で考えていきたい。

委員

「エリアに居住しているなら通える」と確約できるか。横浜の子は入れませんとにならないか。

事務局

今も都筑区は中原、北綱島のバスが走っていて、すべて北綱島ということではない。

教育長

県と調整していく。

委員

一昨年に県議と「北部にプラス1校」の話をしたとき「中里学園跡地への学校計画時、北綱島の閉校は想定していなかった」と言っていた。今まではともかく、これからは情報交換を行ってほしい。

県と市が話し合ってもらいたいと言ったら、先日教育長が「やります」と言って頂いた。保護者から再編に「反対してくれ」とも言われるが、反対のための反対でなく、互いに認め合い将来について話してもらわないと。この問題は政争の材料にしてほしくない。

委員

分教室となっても現在と遜色ないと示すべき。保護者にわかりやすい説明が必要。市費で追加する等明確に。

教育長

定数が見つからないところは市費でやる。

委員

これまでの説明で「同じ」と表明があったが、「質が落ちる」と思われる。わかる資料を作ってほしい。一つの安心材料となる。管理職についてもイメージがあるのならはっきりと出してほしい。

事務局

分教室に置く管理職とは、副校長、校長代理、準校長が考えられる。

教育長

北綱島には、今後フレキシブルに対応していくなれば何がベストか検討中。

委員

福祉施設を立ちあげた時に法律上の定数は利用者7.5人に職員1人だったが、市が「市費で2.5人に1人にする」と言ってくれ、すごく安心した。保護者は分教室となることで色々減るのではないかと不安。しっかり「今と同じ」「市費で対応する」と言うと安心するのでは。

事務局

狭隘化が問題となっていた学校で、児童生徒を減らし適正化する考えだった。しかし、話を聞くなかで、児童生徒が減れば教員も減るので、「分教室になるから教員が減る」と話が混同しているとも思った。市費を入れてでも水準が保てる人員を確保したい。

委員

保護者は現状の環境に満足しているため「減らしたい」と言うと、「追い出される」みたいに見える。やはり最初の「閉校」の言葉はまずかった。「多いから減らす」という言い方は注意する必要がある。表現はデリケートである。

教育長

わかりやすい言い方、伝え方を考える。

委員

子どもが多くなってきて、北綱島のあの状況では教育は無理。今の環境のまま教室に詰めこんで、お世話していればそれでよいという考えではいけない。

教育長

当時の保護者からは北綱島は狭いから移転してほしいとの要望があって、我々も必死で場所を探した。しかし思うようにいかず、左近山を整備して、全体で少しずつ調整していくこととした。

委員

北綱島はなくならないか。ずっとあると思っていいのか。

教育長

そのとおり。お子さんがいるので。

委員

バスに乗れていない医ケアの子もいる。体力がなく通学が困難な子もいる。それも踏まえた地域の計画編成をよろしくお願ひしたい。また、看護師だけでなく、学校の先生がバスに乗りながら医療的ケアができないか国は考えている様子。

事務局

地域での受け入れのモデルを始めている。近くの学校に限らず、希望を聞きながらやっていく。医療的ケアについては別の議題で考えていきたい。

【肢体不自由特別支援学校における授業展開等について】

(資料説明) 事務局

(委員持参資料説明) 委員

他都市の例を交えながら、肢体不自由児への教育課程に関する必要性を御説明頂く。将来に向けてその子なりの力をつけていくために、教育で何をしていくかが大切。

【以下、発言要旨】

委員

卒業後の障害者施設に学校の先生はなかなか来ない。卒業後も教員に来てほしい。

委員

幼児期に診ていた子も、数年後に驚くような成長をしている。それに会うことは喜びでもあり、卒業後の状況も見れる。一生通して付き合わないといけないと思う。

委員

北綱は狭隘化が進んだことで特別教室を教室にしているが、そういう状況でなかったら何を学べたのかなとも思う。保護者は、「今のままでいい」と言うが、特別教室は本当に大切。

委員

人数のことを言っているが、学校には「物理的な面」と、「人間関係の面」がある。保護者は、物理的に狭いとは言ってきたが、閉校により、隣との交流も含めた「人間関係」が壊れてしまうと感じた。人間関係があるままで、物理的に広くなったらよかった。保護者には「人間関係」のことから話してほしい。

委員

訪問級で、体調良ければ登校する子もいる。通学距離に配慮してほしい。北綱島の存在感を感じてほしい。

委員

重度の子が集まる場面と、色々な子が集まる場面があるとの説明があったが、重度の子だけの集まりでは言語が出にくいことなどあるので、色々な子が集まる場面があるのは良い。また、一人ひとりで学ぶ場面と分けたのも良い。

委員

北綱島には小学校の子が自然に入ってくる、これはすごいこと。小学校併設は横浜の文化。インクルーシブで、互いを考えられるという横浜らしさ、これは続けてほしい。

委員

確認したいのだが本日の話の中心は、左近山に新しくできる学校での教育の話なのか。横浜の肢体不自由教育全体の話なのか。どの視点からのスタンスの話し合いなのか。

教育長

どこでも教育課程の中身はしっかりやっていかなくてはいけない。北綱島でも、左近山でも、上菅田でも。その上でその場所ならではの良さを加えていく。

事務局

5校あるが色々な子が同じ学校にいる。色々な子にどう対応したらいいか考えていく必要がある。県立校も色々な子が入ってきている。県でどうしているかも学んでいきたい。

委員

障害が重くても「準ずる」教育を望む子もいる。しかし、一般中学と同じ授業は不可能な現実がある。一対一で教えるとその間、他の子はどうするかという問題がある。教科専任の教員を配当してほしいが難しいだろう。大学へ行きたい子もいるが、塾や家庭教師で頑張してほしいと最初に説明している。

理想は色々あってもどの学校も悩んでいるのが現状。人が必要。保護者からも勉強させたかったのに遊んでばかりだとの不満を言われることもある。

委員

小6まで一般級だった子を特別支援学校に送って後悔したことがある。母も迷っていたが、一般校は無理かと判断した。学力はダウンし母は後悔したが、子どもが「ゆっくりやるよ」と逆に慰めてくれたようだ。

教育長

一般中学校に、排せつ介助の子が入学した。人的支援は市費で出している。小学校から一緒の子どもたち同士でカバーし合っている。

委員

その子にとっては良いだろう。特支校がセンター的機能でバックアップしたらどうか

教育長

この学校は県立校から来てもらっている

委員

様々な障害の子が校内で交流するのも良いが、横浜は併設校での交流も無くさないでほしい。

事務局

副学籍交流をしている。人手のこともあり頻繁には出来ていなかったり、教科学習等も難しい現状はあるが。

委員

現状の副学籍の目的は「地域に住んでいる」ことのアピール。教科学習は、受入校側から「評価はどうするか」等の課題があるなど難しく、追いついていない現状。

委員

埼玉の支援籍は居住地交流とは違い、特徴的である。

【医療的ケアに関する現状について】

(資料説明) 事務局

(委員持参資料説明) 委員2名

≪時間により会議終了、意見等については次回に持ち越すこととする≫